

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第3章の概要 (1) (48.1 ~ 64.29)

著者	大島 由紀夫
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	16
ページ	97-107
発行年	2020-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001841/

[資料]

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第3章の概要 (1) (48.1~64.29)

大島 由紀夫*

(Accepted November 18, 2019)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 3 (1)

Yukio OSHIMA*

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* I.3 (48.1~64.29). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' This chapter treats the situation long after the spread of HCE's scandal by O'Reilly's song, HCE's trial and acquittal, people's opinions about HCE's scandal and HCE's emigration to America, etc.

Key words: *Finnegans Wake* Part I.3 epitome

霧を見ろ！ 濃くなっている！ すごいものだ！ 異常な霧で、助兵衛爺も、性悪女も、ブスの少女も、重婚者のボブも、彼の哀れな老女も、男女入り混じって亡霊となっている様を見て君は笑っているね！ ドミノコ会修道士が酔って性行為を働いた暴行事件も、この霧の中では矮小化される！ この湿気の王国には、実際有り余る有毒の雲が、この霧とともに解き放たれている。しかし、バラードを耳にしたり、自ら語ったりした人々は、詩人の家族とともに、ヴェルゴブレット自身【古代ケルト人の1部族アエドゥイ人を治めた執行官】とともに、カラクタクス【古代ブリタニアの部族王。ローマの侵攻に抵抗】が治める群衆とともに、全員あたかも今存在していないかのようであり、これまで存在していなかったかのようである。おそらく近いうちに我々は、ここでインケルマン【クリミア半島南部の町】にいるズアープ兵【フランス軍歩兵】の芸達者な者たちの間で、パントマイムが演じられるのを耳にするであろう。ミックが無言で演技し、ニックが女の子の物まねを演じるのだ。出し物は『フェン・マック・コールとロッホ・ナッホの7人の妖精』、『ガリバー旅行記とハーレーン』で、配役はヒルトン・セント・ジャスティス（フランク・スミス氏）、イヴァンヌ・セント・オーステル（J.F. ジョーンズ氏）、4つの役をルーカンのコールマン、合唱はオデーリー・オドイルの聖歌隊。そして過去のチター弾きが仲間たちとツィンツィン、ツィンツィンと奏でる。スケ

ールは大きくないが、音楽のかかなりの才能の持ち主であり、きわめてよい耳をもち、それに見合ったテノールの声もち、それだけでなく、純粋に軍人的雰囲気を持った（彼はテニソン風に始めるが、我々が団結して生命を生み出すのと同じくらいに、この詩の一行一行を精魂込めて書き上げたのだ）、詩人中の詩人であると言われた哀れなオステイ・フォステイが語った、罪人であるエアウィッカーについての物語（これは読み応えがあるが、端から端まで、初めから終りまで、全くの虚構であり、中傷的要素はなく、訴訟に発展するようなものではない。そしてこのことは、作品全体について言える）については、その終りがどうなったか誰も知らないのだ。（49）もし彼が幕を上げないうちから、皆から嘲りの口笛を吹かれていたならば、彼が運命の幕を下ろしたあとでも未だ口笛を吹かれている。彼は過去の人間となったのだ。彼の夫役であった哀れな老いたアハラ（オカロフだろうか）は万事に落胆し、この時かかとの磨り減った、キュッキュッときしむ靴を履き、クリミア戦争の終盤に兵役登録をして（夜が再度やって来る！）、ワイルドギース的精神を発揮して、アイルランドの芋的軍団であるタイロン騎兵隊に登録したシュリー・ルーニーのように、群衆の中を1人戦争へとさまよい出て、ブランコ・フジロヴァ・バックロヴィッチという仮名（偽物）で、ウォルズリー【イギリス陸軍元帥】とともにしばらくの間兵士になっていたのだ。そしてその後、この旅鴉と、昔の海

*Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6, Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学名誉教授)

賊王の館であるパンプ・コート・コランバリウム【地下墓室】の大理石の広間とはお互い見つめ合い、そして両者ともその安息の地を去ってしまった。というのも、川の向こう側のヴァジレフ・コルニックスの戦場で、この法王についてのリーフレットを年老いた者【父親】に残し、義理の母親には生のチョコレートを残すと言って、不幸にも持ち物とともに彼は消えてしまったことが明らかになったからだ。**実際そうだったのだ。**ダブリン・インテリジェンス【17～18世紀の新聞名】によると、哀れな老いたポール・ホランは、犯罪に対する情熱ばかりでなく文学に対する情熱をも満足させるために、精神障害に陥っている多弁な判事によって出された示唆により、北部地域の住民のために建てられた精神病院に送られてしまったらしい。またオラーニという名前で、彼はすぐ様出番の長い役割を演じることのできる、一座の端役となっていたかもしれない。実際彼はそうであった。身体を洗いもしない浅ましいサムは、陰気で上品ぶったダブリン市民だが、身体を洗いもしないハム【聖書中のノアの息子、ここでは第2章で出てきたプリスキー・ショーティーのこと】に常に付きまとわれ、召還者であるイズラフェルの合図で、歓迎されない男の人生の浮き沈みの後、ハロウィーンの夜に酔って裸の状態で苦痛なく死んでしまった。彼はノルウェー人であり海賊仲間である、彼の最後の血肉を分けたベッドでの喧嘩相手に代わって、足下を崩し、後ろから押される形で【ベッドから】落っこちて、骨と頸椎に打撃を受け、世間から相手にされないまま、腹を膨らませ、老いばれ馬のような残骸となって、あの世に行ってしまったのだ。【隠されていた】彼の真の姿が隠れきれずに限界に達して露になったけれども、この月並みな酔っぱらいについては、彼が次のように厳かに言ったと伝えられている（オーケストラボックスにいる人々は彼のことを「プロンプターボックスにいるべき人物」と茶化した）。すなわち — この時、バス社のビール瓶の頸状部が落ちて栓の箱に転がり込むように、あるふとした考えが、彼の脳裏に押し込まれたにすぎないのだが — スカンジナビア人よ、私の夢は実現したのだ！ サア、マイケル・キューザック【『ユリシーズ』の中の「市民」のモデルの愛国者】が言うところの自我の力を100倍にして前進しよう、— そして私は今後も、言うまでもないことだが、それを繰り返すことによってその自我全体を発進させていく、— こうなるのは、アイデンティティが不分明な中で、相容れない見方、考え方を混ぜ合わせ、1つに統一することによってである。(50)この状態になれば、パン屋の言うことも肉屋の言うことも、我々を悩ますことはなくなるだろう。そして（しかしこの点において、彼の鉄の蹴爪による攻撃の始まりが、我々に心の準備をさせたかもしれないが、所詮我々はいたいにおいて、芥子の辛さによっても悩まされるものなのだ）この【我々の進む道を照らす】傑出した茶色の燭台は、ノランの考え方も溶かし平穏なものにするのだ！ と。**実際彼はそうだった。**2人芝居で

は自分を隠していたが、預言者であり、話している中で辛辣な言葉を突き刺す、最も品のある、12人の小人のような、お調子者の、彼女の女房役のラングリーも、地表から、移ってきていた南の平原から、何の痕跡も残さずに姿を消してしまった（別れの挨拶もせずに行方をくらました際、彼は誹謗中傷の汚濁の書から、何ページかを丸ごとこっそりもって行ってしまった）。全く何の痕跡も残さなかったの（書の母【コーランの原型】は、ちり取り用の小さなほうきを使って、彼女の陰部の被膜になされた彼の痕跡を消し去った）、この浮浪者（彼はユーモアに満ちあふれる人物であった）が、そのコメディアンとしての生息地を闇の奥へと移してしまっただとは考えなかった人たち（というのも、ラングリーだったかもしれないレヴィー【父子同名のR・M・レヴィーは、ともにバイオリニストで、父の方はダブリン王立劇場年代記の共著者】は、本当はバガニーニの生まれ変わりだったかもしれないし、また自発的にヴォスデン【ヴァル・ヴォスデンはダブリンのミュージックホールのエンタテイナー】となる人間だったかもしれないからだ）全員は、心を揺さぶられて次のような思索に耽った。すなわち、最も奇抜な話し上手たちにとってのティーでありトースターであるサン・ブラウン神父が、スペイン西部の女王にとっての忠実な慰み手であるドン・ブルーノ神父であるのなら、2人の人物、即ち、導師の称号をもち、信心会の指導者であり、人の心を震撼させる彼の祭壇に（我々の中で、この導師のこと、この高潔なノラン・ブラウン神父のことを覚えていないいかなる人物が 있을까）、罪深い社会のセイレン【キャッドの妻】（〈ローマン・カソリック系の〉出版物の至るところを見よ）が幸いにも熱烈に愛着を抱いている、厚かましいカルメラ会修道士であり、楽天的な悪徳暴露者である人物と、もう1人、ずっと頭の片側にかぶっている、ペン筆の柄の部分（もし閣下夫人が彼を見たら、彼女は怒りだす！）のような帽子に、福引くじの券を花形記事のようにしょっちゅうつけている不快な愚か者であり、また熱い湯で洗われたテーブルナイフ（彼のポケットの中で心配げに光沢を出している）で不法行為を働き、半ば私的に有罪となった人物、この2人の人物は同一人物で、ダン・ヒル【ホース岬内の地名】に住む、まる数年にわたってパイプを吹かし、あの記念すべき日の朝かまたは5月の木曜日の昼に將軍【HCE】が偶然出くわした俗物【キャッド】であったのか、と。彼らはそうだったのか。**実際そうだったのだ。**

フィスリン・フィル【歌名、ホスティーのこと】が一端おしゃべりをやめてしまったら、人の運命を見せびらかすことなど愚かなこととなる。誰であれ、塩辛い海の波に乗って、ほとんど何も存在しない無のホテルに行ってしまった者【歌の歌詞】に対しては、それが誰であれ、我々がしてやれることはほとんどない。というのも、その人物には二度とお目にかかることがないからだ。それにもかかわらず、普通の人間の容貌は、悲しみが長い期間のうちに薄ら

ぐにつれ、(51)時とともにその自我を変えていくことがある。このことは最も一般的な自明のことである（目新しいことではない）。そのため、辺りがもやもやとしていて見通しが悪い状況の中（というのも、千一夜のこのシェヘラザードにおいても、確実に人の正体を明らかにするためのあの剣は、決して振り落とされることはないからである）、半カツラ【頭の一部のみを隠すカツラ】をかぶり、スクウェアカットコートを着、ストックタイをつけ、袖付けは見苦しく、ダブダブのズボンをはき、足を引きずって歩き（彼はたびたび書物の中の出てくるあの男、セント・パトリックとして言及されることがある）、既にハゲ（人はあらゆる年代において、奇妙な他者に初めて出会うものである！）の方向に向かい始めている（欲望の証！）この個人を特定することは、手際よくいかないことである。この人物は、トレンチコート風の上張りを着た3人の寄宿学校の怠け者たちウィル、コン、オットーから、居酒屋の主人と2人のスカーフを巻いた女子と3人の熊皮コートを着た独身の男子にまつわる、ほとんど信じがたい冒険についての、寝小便を引き起こしそうなゴーストストーリーを、彼らヴォル、ボヴ、デヴにもう一度話してやってくれるよう求められたのだ。少女と若者、しかし彼はヴァイキング侵入の時代からずいぶんと変わってしまった！ 1箇所、2箇所、3箇所、4箇所、5箇所、6箇所、7箇所、8箇所、9箇所！ あの多くのイボ、あの見苦しい皮膚の変色部分、あの半ば不気味な皺（我らの兄弟 E の顔に何が起ったのか。）、そして（茂山【中国雲南省の山】の神殿が我らを助けて下さいますように！）彼が生やしていた大きな菌類の公園【髭】！ 酒を飲め！

気晴らしというのは一般的なものだ。あれは酒を飲むための主イエス・キリストご自身の日【日曜日】のことだった（延期されたレガッタの開催を待つのは、単に海辺近くでの羽根つき大会を待っているのとは違う）。そして全く遺漏のない説明を要求する声が、この当事者（パットの代わりに）にかけられたのだ（彼は姉妹島【アイルランド】の原住民であった — ミーズ県民か、それともメッカ市民か — 。どれも平均的な田舎者のトルコ人のものだったと言われている（尤も、この岬の住民の、有声音となる鼻汁のすすり方と、Z を発音する際のくしゃみのような音の出方は、我々をシルル紀やオルドビス紀の岩や山の世界に連れ戻す）、彼の履いている短靴と、完全な民族的な目と、地方の色合いと、地方独特の体臭とによってそう判断されるのだ。そしてそれゆえ小巡礼【個人的に行うメッカ巡礼】を成し遂げた彼は、昔から存在するアイルランド人と豚との島を、血縁のない親族関係にある見知らぬ国【イギリス】の南西に位置する虚勢の国を、**迫害された罪人の避難所**を、彼の本拠地にした）。それはいつもと変わらぬ時、数分の間（それ行け、ダニーボーイ！ パーテンさんよ、10対1だ。10ポンドで勝とう）、呪わしい無風状態の間に（彼女の花で飾られた窓辺近くにあるリンゴと、放り上げて占うため

のシャルロット【菓子名】、これらが唯一彼が崇めているものであり、彼が保っている唯一の楽しみだ）、香ばしい香りのひょうたん形のパイプを使うために、手を休めていた時のことであった。(52)そしてその時は、彼はそれほど長い間赤色の家庭用スタウトが入っていたわけではない空瓶（このことについて以前諸君は、酒を飲みながら本で読んだことがあるが、すべてのボトルが、酒に溺れた人生史において残虐さを和らげるものではない）を、アニー・オークリー【アメリカのライフルの名手】的冷酷非情さで（いくつかの対になっている完璧な刺激物、そのうちのたった2つしか残っていない。彼が心を打ち込んだものだ。リリーとトゥトゥ、そいつらに栓をしろ！）仕末することで、週末の気晴らしをしていたのだった。1つか2つの人生を割いて、世界の中でいっぺんに自分が占有する空間を未だ得ようとしている、亡霊のようなこの導師は、連発銃に火薬を詰め、時計をリセットし立ち上がった。そして故郷のトルカ川から遠く離れた、静かな英国風の庭（陳腐！）において、野生のウィディントン【ウィディントンは3代目のダブリン市長の名】としてずっと知られてきた、酒飲みであると同様だまされやすい人物である彼は、ませたお騒がせ屋3人（鏡はいかなる醜い人物をも助けない。あなたの言っていることは正しいと思う。あなたの持参金があなたの顔である、と若い女性は答える）の前に呼び出され、単調な熱のこもった奇抜なゆっくりした声で、我が真の兄弟よ、我が最も心を許せる兄弟よ、と言い始め、まさにこの人物について語り、憐れみ深いこの人物について話したのであった。今や我々の運命の担い手の、我々の聖なる父の神秘的な服装をして。

兄弟喧嘩の末、テレビは電話を殺戮する。我々の目は彼らの交代を求めている。彼らを見ることにしよう！ 想像上の事柄でも、その特別な一面を切り開きさえすれば、狼の骨を燃やしている火葬用の火が、その痕跡のほとんどを照らし出す。火が興されれば、その炎は明るく輝き、それゆえあらゆるブタの息子たちは、諸君と私は、知りたいと思っていることに近づくいくつかのチャンスに接するであろう。ハンフリーの当初の服装は次のようなものであった。後ろに日よけ用スカーフのついたビーバーの毛の帽子（気の狂った王に仕える大監督者が持つひょうたん）、普通のすべり結びのネクタイ、肘が自由に動かせる体にぴったりのオーバーコート、新しく縫い取りをした生姜色の下着、儀式用のスレート色の傘、青銅色のボタンのついたウェールズの肌理の粗い毛織り服、手につけられた長手袋、ちなみにこの手は、彼にとってそれほど巡り合わせの悪い時ではなかったとしても、彼の国家が少し前から必要としていたように思われるデステレ【ジョン・デステレはダブリンを統治するダブリン自治団の1人。オコンネルと決闘し死亡】のような人物に彼がなっていた可能性を打ち壊してしまっていた。この時他者の言葉を使いながら、しかし小国【アイルランド】の既に口にされていた言葉を的確に

用いて（おそらく、畑で落ち穂拾いをしていた家族が使った言葉で）、自分の心に満ちているのが、主にこの場を離れたいという気分であると思ひながら、やや沈んだ調子で、微笑みを浮かべ気味に、間もなくこれから親となる者たちのために（その女を見つけよ）、その心を揺さぶられる場面を適切に描き出した。静寂に溢れているその場の状況を！（53）ピンの落ちる音でも聞こえるかもしれないこの場の状況を。木や花が咲え猛っているのに！ そこは絵に出てくる荒れ地のように思える。あるいは、アラス織りの壁掛けの押し黙った図柄のようだ。完全に静まり返った光景だ。シングモート【ヴァイキングのダブリンにおける議会】（堅苦しい！）の時代と同じくらいに古の、同じくらいに不可解で神秘的な、同じくらいに示唆に富む、キリスト教徒の77世代目の同胞のこの幻影が、無線の大気を通して我々の元に聞こえて来る。（盗用だ！）

そしてその後も度々、軽快に揺れながら走る、座席が向かい合い肩と肩とが触れ合うほどの馬車の中で、ユダヤ人がキリスト教徒に、聖人が賢者に、草むらでとびきりの美少女が彼女よりももっと気取っている彼女の妹にウィンクしている間に、長柄に挟まれた馬が馬車の中の恋人たちをあざけっている間に、ハンフリーの墮落と上昇についての話を伝えていた。大きな鐘楼の反対側で、人々の涙や衣服やノエシスやパラダイムが、アイルランドにおいてどのようにふふ復活するのだだろうかと、いったような話を。彼の復讐の鞭を徹底究明せよ。サーストンが語った話を！ 見よ、見たまえ！ **あの木、あの石を**。8月の安息をもたらす樫の木を、松しか生えていない月の光に照らされた荒野に寒々とそびえるオベリスクを。厚みのないピンク色の、アイアース【トロイ戦争の英雄】のような不屈の精神をもったこのオベリスクを。溝掘り人に時間を告げるアンジェラスの鐘の音は、彼らの道具の上でたわみ、薄茶色の鹿がつける柔らかな鈴の音は（**崇めよう、跪こう！**）、真夜中の12時が時を告げる時、その鹿たちが静かに近づいてくことを明かす（**遅い時刻だ！**）。そしてこの偉大なる護民官が、このイギリス人が、聖職服からサメの革の、蛇模様の袋を鮮やかに取り出し（模造品！）、そして何と諸君がふかす類の小さなものではない、それとは逆の、洒落た一級品の両切り葉巻を1本つまみ、頬を相手の頬に寄せながら言うには、いいですかね、私はあの茶色の奴【ハバナ葉巻】をくゆらし、まる30分ハバナで過ごすつもりだったのですよ。何と大胆なことか。ハバナでは戦士の姉妹も、古高地ゴート語【ゴート人は荒くれ者というイメージがある】を話すことはないであろう！ そういう訳で、彼が言わんとしたことは、実際、諸君、これは確かなことなのだが、ロレンツォ・トゥーリー通りにあるイーグル・コーク・ホステルで閣下に出会った時、何と最高の居酒屋の主人であるこの巨匠、陛下に対して、ゴート、モーヤ、ブレイ・ヘッド、パディリックで作られた菓子パンを、どうか恵んでくださらないか、どうか閣下、聖胃袋の穴に澱粉食品を居

座らわせてもらえないでしょうか、という嘆願だった — 我が友よ、これは諸君にとって奇妙な願いであり、諸君の息子の息子、つまり孫を完全に困惑させるものである。とは言っても、孫たちがこうした噂話の熱におののいていても、諸君自身の汗と悪口に満ちた最盛期の時代は、何回も何回も2人の話を高くもち上げたのだけれども。

上昇したキング・ビリー【ウィリアム3世】と下降を伴いながら上昇したクククロムウェル【両者ともアイルランド迫害者の代表】にかかか乾杯！（54）少年たちよ、立て、そして彼に目標を定めよ！ 見よ！ 彼らはいなくなったが、懐かしい思い出は存在するのだ。現在までの彼らの時間は、ここにいる彼らの後継者たちと結びついている。しかしそうした過去の者たちは今どこどこにいるのか。ウェルキングेटリクス【古代ローマに反逆し、シーザーに殺されたガリア人の首領】や「哀れな老女」【アイルランドのこと】のカラクタクス【古代ローマに抵抗したブリトン人の首領】と彼のアン・ヴァン・フォークトは。死、ん、だ！ 終わったか、命を終えたのか、それとも安らかに眠っているのか。諸君の口を丁重に扱え【沈黙せよ、ということ】！ **注意せよ！**

どんなに単調で惨めな生活をあなたが送っていても、ハレー彗星のように確かに、未だ60人や70人もの声が入り乱れて、あなたの墓のところでしゃべっているのがあなたには聞こえるだろう。イスラムの男たち、ブルガリアのユダヤ人の女たち、ノルウェーの少年たち、ロシアの少女たちが、あなたの憩いの家の吹きさらしの青銅でできた門構えの前を過ぎ去る時に。お嬢さんたち、気分はどう？ 元気なの？ お嬢さん、左側の一番はじのドアをどうぞ。列を作っていますよ。クラウン貨幣が1132枚ある。エッ、どういうことだ、なぜなんだ？ 旦那さん、お茶とバターつきパンは？ すみません、ホラ。彼の飲んでいたジュースにちなんで。ごめんなさい、聖パトリック、楽しいとお思いですか。パ【パトリック？】 — のように — 高く — 飛んで — パパの — パ — のよう — 本当に — 長く — 長く。ネエ、あなた、聞いて、ハンケチを持って化粧室に行ってらっしゃい。綿のズロースとオレンジ色のストッキングなの。オーオーね【ヨーロッパ南東部の化粧室の印】。私の樽のような体だと、小さい人には少しばかり大きすぎる。値段はどれくらい？ 1ドル。御者さん、今暇？ ありがとう、それで君は？ 大丈夫よ、ありがとう。

そして彼は空涙を浮かべながら言う。キャッドよ、どうか小銭の価値を知ってくれないか。マギーよ、夜小説を読むのはやめておけ！ 再びマイクロフォンを使って大衆酒場から伝えよう！ あの袋のような腹をもった奴が罰を受けるべき奴なのだ。我が陽気で楽しい仲間のメグよ、私は全世界の人々に向かって、マンモスの時代から数世紀にわたって家長たちが、イギリスにおいて我がリフィー産の卵が商業的に高い地位を占めている（通常のことだ！）のを知っていると、同じくらいに確実に次のことを目撃す

るよう呼びかける。つまり、偉大なる教師【神】の健やかなる球体【目玉】の御前で（祖先から受け継いだ、油染みた液体【汗】を、睦人天皇【明治天皇】がもっている垂れ髭左右双方から滴り落としていた（金のない、もっと慎ましやかな会衆は、その小さなひび割れた口を決してつぼめもしなかった）、尊敬すべきあの安息日及びアルコールの違反者は、この場所でモミの棒を前に伸ばし、彼の三色の麦わら帽に触れ、それをその帽子の中の古色を帯びた輪にひっかけて持ち上げていた（その帽子を自分のものとするのに、ステッソン【米国の帽子業者】に1ポンド1ペンス払った）。(55)そして彼が言い添えることができるならば言ったであろうが、自分が導いている青年たちに対して、あらゆる人たちがすることを、自分と同じようなやり方でやってもらいたいと、心から願っていた）、近くにあるあの記念碑の姿同様まっすぐに、自分の居酒屋と日陰の商売に対する信用が、すぐにいい行き渡るであろうことを。（嘘はつかない。）微笑みを浮かべよ！

アトレウスの館は、実際（以前のこと、昔のことだ！人々の声は仲間を悼んだ！）沼地の泥の土手のように崩れ落ち、荒廃の際にあるが、死んだ者の骨は再び復活するのだ。彼自身がかつて言ったことだが、鉛色のものであれ、軋んだものであれ、人生とは（彼の伝記は彼の命を奪ってしまう。まだそうっていないにしても、後にあつという間にそうなる）目覚めなのである。そして我々の生活の営みの【休息をとるための】寝棚の上には、我々の祖先が蒔いた種の実ったものが乗っている。これは世界の建設者が、法により、生まれたあらゆる男女の胸に適切に記したであろう成句なのだ。新たによみがえった、雌鳥と改革運動者が互いに交わるこの場は、今世紀における今後の末梢的な事実の探求者たちの1人にとって忘れてはならないものである。（この時、（税関出身の）（退職した）（傷ついた）非市民が、65歳定年の法の下、洒落た黒の現代的な容姿で、つやのあるタン皮のバーリントン靴をはははき（タモシャンター【スコットランドの帽子】、いか胸ワイシャツ【取り外しできる胸当ての付いたシャツ】の代用品、ピージャケット【厚手のウールのダブルジャケット】の代用品を身につけ）、パイプで指し示しながら、哀悼の言葉を繰り返した。そして人々の心臓をグサリと刺し、分別のある人々のビー玉のような目から満杯の涙を跳ねあげさせた、この今までより遥かに悲しい事情を今抱えている、上級のアイルランド人が乗る寝台付き特別車両に乗った、昔助祭長であった故 F.X. コピンガー（彼は落ちぶれても活気に満ちていた。守り手である母よ、彼に乳香酒を！）の、名ばかりの縁者に恭しくお辞儀（誰かのまね）をした。風通しの良い車両の円窓越しに、背中合わせになってツアー客たちは、彼らの編成車両が巨大な生命の木の周りを、円を描くように回っている中、渦巻く畏敬の念をもって、その目を丸くして、ツアー客としての興味を持って、葉に覆われた姿が葉をまもっていない姿を、葉をまもっていない姿が緑色になった

姿を、緑色になった姿が凍っている姿を、凍っている姿が葉に覆われた姿を追い回しているのを見ていた。周りに樹木がない中で、そびえ立った、先の尖った、赤らんだ（それを繰り返している）不死鳥であるその木、葉を燃え立たせ、愛のある幸運な、花をつけたその木を見て、ツアー客たちは心の奥底で、群れをなした痛みに襲われる。というのも、キャッドヌス大司教がその著書である『アイルランドの原野』を脇に置き、ツアー客たちがカッスルバーで一杯引つ掛ける前に、彼らの耳殻が諸事項を受け止めるのを願いながら、要求に応じてこの本について語るたびに、ツアー客は皆、ギャリクソン【デイヴィッド・ギャリクソンは18世紀のダブリンの俳優】がしかめ面によって表したグリマルディ的道化性【ジョゼフ・グリマルディは18世紀のイギリスの道化師】が、デウス・エクス・マキナによって、(56)あの偉大なるエリントン【トマス・エリントンは18世紀のダブリンの俳優】がはっきりと見せたちょぼローこの表現は親密な仲間の表情の演技に対して、それを模倣した者が口にしたものである一に置き換わることで具現化するのを見、そしてそれが現れるその話の箇所についての新たな解釈を聞いているうちに、皆かつて海岸地方に住んでいたが故に、この自信たっぷりの、人々の心への射手が唱えるこの不遇なる者の招魂を願う祈りの文句を聴いて、ただただ大きな割れ目（【時間の】深淵）を越えて、**少しの間だけ自分の居場所を得た**に過ぎない存在として、心の最深部で自分たちのことを想像することが出来たからだ。しかし常に腹話術を使うこの扇動家は（塩分を含む大洋のワルハラのような珊瑚礁に打ち寄せ弾む波も、彼ほど激しくはない）、シルクハットをかぶった、セイウチのような偉大なる変人であり、黄昏の薄闇を背景に（その神殿にはイスラムの聖なる勤行時報係の声があればいいのだが一神聖な場所なのだ！一そして忠実なイスラム教徒の大地につける額もそうであればいいと望むことだが、この縁のないトルコ帽にも、一遺灰に祝福を！一イスラム戦士の刃の力があればいいのだが）、殺人者として銃を持つ体の部位【腕】を、間もなく、少なくとも瞬間的に、彼の霊廟（その中には、シジュウカラがいつも止まっている柱が立っている）とななるべき鉛筆として屹立するであろう巨大な鉛筆【ウェリントン記念碑】へと伸ばしたのだ。その間、ローランド【ロングフェローの『ブルージュの鐘楼』に出てくる鐘】の鐘が鳴り響く中、彼の罪なき顔一面に、ほんのわずかな悲しみの水滴【涙】が頬にうねり【微笑】を作ろうとしており、そうした諦めの影がつかみどころのない、人の心に訴えかける雰囲気醸し出していた。それは入水の運命に惹かれた若者の顔が、初めからまさに終わりまで一様に、陽の光が棺の蓋を照らす様を眺めているかのようにと言える。

他でもない世の始まりの時代に、悪魔の国からやって来た、よそよそしい、無愛想な旅人、怠惰な吟唱詩人であり、とりとめのないことを口走るさすらいの詩人である人物

がいた。彼は大儀そうに、遅鈍な猫のような、俗物の目を、十二宮図の不完全な宮へと上げ、そして携帯用酒瓶のくびれた部分や、割れたコップや、踏みつぶされた短靴や、芝草や、ボロボロの箒や、キャベツの葉や、干し鰯の周りを長い間うろうろし、「エンジェル」亭に不法なウイスキー、紅茶、ポテト、煙草、歌付き女付きのワインが彼のためにとおかれてあることに気づき、舌舐めずりしたのだ。そして周りを気にせず、何となく微笑んでいるような不気味な表情を浮かべ始めた。(馬鹿馬鹿しい！ その特定の時に、鈍感な憂鬱氏の帽子の中を吹き抜く知性の風などそれほどなかったのだ！)

しかしこの行為に関して、**そのような考えに浸って微笑んだその形相**因は何か。彼は何者であり、何者に対して微笑んだのか(オブリーヌが彼の名前ではない。また褐色の肌をした者が彼のメイドではない)。彼がいるその場所は誰のものなのか。何故なのか、誰のものなのか、どこへ行くのか。どの程度適切なのか。その騒動はいつのことだったのか教えてくれ。その墓場となった町について言ってくれ。そこが棒術使いの地域であろうと、漁師の町であろうと、ニラネギをなめる者の土地であろうと、リンゴ水を飲む地域であろうと、ポテトの産地であろうと。(57)雨を強めていたすべての支配力は静まったけれども、我々はその指針となる声を耳にし、周囲を判断することができる。というのも、その旋律はある思考様式を生み出し、その思考様式は、警察官においても、策略家においても、富豪においても、庶民においても、ある行動様式を生み出すからだ。罪、罪、罪、罪！ 4人の神父は、身を低くして横たわっているミン、チン、シュニと一緒にいる、2人の抜きん出て可愛い娘を追い求めている。我々はこの徴税人のトラブルがどうなるのか、食屍鬼の精霊に期待して腰を下ろそう。しかし彼が現れるところはこちらではない。彼らは彼らの持ち場から答える。自分たち4人の声を聞け！ 自分たちの咆哮を耳にせよ！ アーマーは言う、私はこのことを誇りに思う、と。クロナキルティは言う、神よ、我らを助けたまえ！ と。ディーンズグランジは言う、私は何も言わない、と。バーナは言う、だから何だというのか、と。ヒー、ホー！【4博士とともにいるロバの鳴き声】。彼は地獄に落ちる前に、心を天国で満たした。水の流れて、ALPの打ち寄せる小川で、心地よく彼に絡み付く、彼女の巻き毛の冷たさで。我々はこの時ただのシロアリだったのだ。ちっぽけな、ちんけな。我々は我々の蟻塚をアレンの丘【キルデア州の丘】、民衆のための丘、巨人の山と感じていたのだ。我々を遠くの雷鳴として仰天させたのは、豚どもの鳴き声だったのだ。

したがって、流言飛語はたとえ我々が手にしたとしても、我々が確信を持てるにはあまりに不正確であり数が少なかった。証言者も見出せず、見出せたとしてもからかい半分で、あまりに信用に値しなかった。この【裁判の】場合、彼を裁く者はどうやら気まぐれな3人であるが、裁かれる

べき者は明らかに3マイナス2人であった。それにもかかわらず、マダム・タッソーの彼の蠟人形は、ほとんど他のものよりも実物そっくりであり(入場料は1グロリー、退場は無料)、ナショナル・ギャラリーは、【彼についての】悲しげな、不可解で神秘的な、永続する展示物に完全に満足していた。お前のリンボクに感謝せよ。こうもり傘野郎め、恥を知れ！ そしてそこでは、トム・クワッド【元来はオックスフォードのクライストチャーチ・カレッジの中庭】が作った彼の像の前に多くの人が立ち止まった。その像は彼の過去の一時期をとらえたもので、満腹になって腰掛け、丸々太って、聖職者用の服を着、陽気な陽の光が下の方へと身をおかわすように滑り落ちていく様を見つめている。そして一粒の涙が痘痕のある穏やかなその頬に皺を寄せようとしており、安物の小さなヴィクトーリン【肩がけ】は、彼の柔らかい手によって握りしめられている。

しかし確かなことが1つある。次の冬が自然の書物のページをめくる前に、そして第1の都市ブラー・クリー市が第3の都市ダブリン市となるまでに、モールズワース・フィールドを通してマールバラ・グリーンまで行ったところにある、法廷としての最高裁判所の小ホールの被告席で、病的で、告発された、非常に多くの顔をもつこの巨漢の異邦人の影が、人々の睦言や無駄話の中で、その大きさをふくらませていたのだ。ここで彼はジェドバラ判事のもと、審理が行われる前に判決を下され、(58)牧師に証言してもらって無罪放免になったのだ。彼のシングモート【ヴァイキングの議会】は彼を零落させ、彼に関わる気違いじみた事件は彼を傷つけた。彼が果たした役割の恩恵は多かったのに。その数は彼の年齢の数を上回った。大きな車輪のダンロップの名前が彼に対して与えられた。いいか、我々は皆、彼を自転車のように乗り回したのだ。家の中での休日のようなであった。彼はこれまで聖職者であり王となっていた。そこに狼がやってきた。羨望が見つめた。つたが征服した。見ろ！ 見ろ！ 皆は彼の真上で緑の枝を振った【『金枝編』によると、王の葬儀のときの風習】。彼の手足をバラバラにしながら。彼の屈辱や失命や断罪や消滅を求めて。叫び声、怒鳴り声、絶叫、ため息を伴いながら。しっかりしろよ、サリバン！ おチビさん、やめておけ！ ロンドン橋は落っこちたが、グラニアは賞金を全部かつさっていった。オイ、どこにも行かせるな、まずいものを食わせておけ。あの悪態をついている者の怒鳴り声を覚えておけ、お前たちの嘲りの声をすべて足しても、奴の心を煽るには十分ではないから。輪になって思い切り歌え！ 乾杯、乾杯！ 乾杯、乾杯！ もちろん全員がこの上なく陽気に騒がしく、しゃべりまくっていた。ラム酒やボースワインやシェリー酒やリンゴ酒やニーガス酒やそしてシトロネードも。酒に強いんだね。ホー、ホー、ご両人、あんたたちは酔っぱらって動けなくなるのだろう。ご両人。でも軽い溜息が漏れる。ヒュー、忘れてくれ！ しかし、見ろ、見てみろ！ 間違いを犯すが大目に見られるべき人

間は、人々を威嚇する神によって、何と我が国を表す像となっているのだ。我らの王だとしても、混乱の中心人物なのだ。そして同じくらいた確かなことは、皆が知っておくべきことだが、取り戻すことのできないあの日々についての人々の乱れた判断の背後で、この忘れがたき樹木の影が浮かび上がっているということだ。

タップ、パップ、またタッパッパッ（火打石銃兵さんたちよ、1発目を撃て！ 兵隊たちよ！ サクソン人のための戦利品を得るために！）、スコットランド連隊の3人のイギリス兵が、任務のない兵隊が、コッカリーキー【スープの1種】とパイを腹に入れながら、（ネエ、チョット、ごめんなさい。どうかお願い）、モントゴメリー通りを歩いていた。1人が意見を言うと、両側の（ごめんなさい！）フィナー・キャンプ【ドネゴール州の軍施設】の兵隊たちは2人とも同意した（ネエ、どうかお願い）。彼らが言うには、あの運命の水曜日に、これから私、野原に行くのよ【排尿しに】と誘って、彼を苦境に陥らせた最初の女はリリー・コニンガムだったのだ。年上の者に大きな怒りを感じ、同情心も湧かず、破壊的な憤怒が荒れ狂った、と兵士パット・マーチンソンは、過去を振り返りながら打ち明けた。（簡潔に！）このサントイ【喜劇のミュージカル】の上演には、後の2人も同意者となった。今度のヴォクソール【ロンドンの1地区】の舞台に立つ女優の1人も、短い休憩時間に（彼女はある有名な卓越した舞台演出家に、ゴミ包みのシトンズ【サラ・シドンは18世紀の女優】と呼ばれたことがある）、ウェスト・エンド【ロンドンの1地区】の美容院でインタビューを受けた。（59）「ハーフムーンとセヴン・スターズ」【店名】で手にした桜模様のボードソア【絹の上着】とガードルとズボン吊りと、「ブラックムアズ・ヘッド」【店名】にあったラシャ織物の服とを身につけ、おそらく普段よりもずっと美を際立たせ、「イーグルとチャイルド」【煙突掃除夫の住処】に住む、いつも煙突をよじ登っている少年たちに囲まれながら、「ブラックとオールブラック」【店名】から来た、とうもろこしと干し草のバイヤーの向こう側で、F…A…夫人は、脇台詞として、打ち明け相手の鏡に向かって、半ば舞台上のささやき声のように、つばの広い帽子（帽子！— 高くのびた手段としての槍【ペニス】に刺さった桶【ヴァギナ】が何を象徴しているのか、現在我々は知っている）を直しながら、次のように思っていると言った。アーサー卿は、世間が不親切であるが故に、クリスマスプレゼントとして、オレンジやレモンサイズの蘭の花を、ひいらぎとツタとともに、クリスマスの会で受け取るでしょう、と。そしてこの時夫人は、タムシや偽医者や猩紅熱や各種皮膚炎を引き起こした、まさしく緑の園遊会となった、彼の誕生日祝いの時に渡された春の花々と比べるとこの蘭は強い香りがするが、それでも完全に大変素晴らしい夜会であったと、マハーブラジャパティ【仏陀のおば兼義理の母の名前】に大きな尊敬の念を抱きながら付け加えた。（3番目だ！）有史以前、ある語源学者が、偶然

速記用口述録音機に次のように吹き込んでいる。彼の固有名は語尾から第2音節目に曲折アクセントがある、と。アーバーン氏やソウルペートル氏やアシュリバーン氏や祈願者製造業者やグリンタルック氏らに雇われていた、「7つの教会」というあだ名のある清掃作業員は、ハヤシ肉料理店で、レバーとベーコンと、それにステーキかキドニーパイのどちらかがついている真昼の昼食をとっている時に、修道女会からこの難問を出された。そしてありがたいことに衝動的に次のように答えた。俺たちはちょうど奴の結婚無効訴訟と、奴の耳から出て行った事柄についての噂話を流したばかりなのさ。俺自身肝をつぶすような話だったけれどね。「オー・ディーズ」亭にいたすべての仲間も、アラター・カラマ【ブダを庇護した隠遁者】と声を合わせて、奴はいかれた奴だ、くそつたれ野郎だ、と言っているよ、と。きびきびと無蓋馬車ジンジャー・ジェーン号に水をかけ、普通の人よりは素面ではあるが、いつもそうであるとは限らない御者は、断固とした考え方をもって。ラリーは話しながらその馬車に水をかけていたのだが、リライト専門の新聞記者に対して言ったのが次の言葉である。エアウィッカーは個人生活ではただの地味な、左翼がかった、他の奴らと結託した、密かな社会改革者だよ。でも皆は、ブレホン法【古代アイルランド人の諸権利、慣習をまとめた法律の総称】によって、奴が議会で叙勲されている、と言っている。エスコフィエ【オーガスト・エスコフィエはフランスの有名なコック】が言ったことには（ルイージのレストランにあの男がいただろう。ブリーヤー・サヴァラン【18～19世紀のフランスの政治家、美食家】が）、確かに、あなたはオムレツが食べたいんですね！ そうですね、奥様。アラ、そうなのよ！ 卵はあの人自身が自身を割らなければいけないのよ【HCEをハンプティー・ダンプティーに見立てている】。だから私が割るのを見てください。あの方は当然フライパンの上に乗っかっている！ テニスをし続けていた汗っかきは（60歳以上）、誹謗中傷を正すことは難しいが、様々な馬鹿話は壁を乗り越え、ベルが鳴っても侵入してしまう。十分成熟したシャケでもこの青二才の愚かなマスの言うことを聞いちゃうとね！ と、息を弾ませながら言っている。（60）施し物小路や死去街道にいる彼女の同調者に、鉄道の駅にあるバーのメイドが語った意見は（彼女は涙流しのルーと呼ばれている）、彼女が哀れみを感じる者に対して奉仕を行う目的について、すなわち、男と彼のサイホン【ペニス】についてのもので、次のようなものだった。何よ！ フィリスが彼女の馬小屋をおしこで水浸しにしてからホイッスルを鳴らしても遅すぎるわよ。ソドミーの奴等が彼に提案したように、彼を留置所に閉じ込めてしまうのは、言語道断の恥だわ。ハア、たとえ彼が、あの病気持ちが、自分が寄る辺のない人間ということで、面白いからといって、彼の拳銃で、どんなものでも、いかなる娼婦たちをも消してなくしてしまうとしてもよ！ よくやった、ダブリンその

ものだ！ キティー・ティレル【歌名】はお前さんのことを誇りに思っている、というのが商工会議所の所員の答えであった（会議所のことを悪く言うのはやめてくれ！）。一方「下着の娘たち」の女たちは口を揃えて、神よ、詐欺師の陪審員どもを許したまえ！ とつぶやいた。青二才の毒舌家の、怒鳴り屋のほら吹きのアラン・レンスキーは、わめくための証人席で尋問され、威勢のいい当意即妙の答え方をした。この時彼が言ったことは、やっつけてやる！ もう一度吠え立ててやる！ いいか、俺は穴居人の追跡やサハラ砂漠でのセックスを応援する！ 彼奴ら雌犬ども2人には、むち打ちの刑を科すべきだ。痛めつけろ！ 立て、豚どもめがけて、猪狩りだ！ やっちまえ！ 施設内ではブレスレットをはめるよう教えられている聖アジダス教会に仕えるある自称殉教者は、この点に関して尋問された際、疑いようもない事実を明らかにした。結果的に、サンキャ・ムーンディ【ブッダのこと】が、許可状を発行してうさんくさい侍女たちをかくまい、尾行者を聖務停止という締め付けをちらつかせて脅えさせ、密かに彼女たちに対していたづらを続けている限り、クスハーフェン【ドイツ北西部の町、ここではヘブン、即ち「天」の意味】の至るところで争いごとが起きるだろう。（下らない！）教区宣教師であり、17歳の信仰復興推進者であるアイダ・ウムウェルは、公園を使っていた擲弾兵たちと他の立派なそして不快に感じていた人たちを困らせたあの事件について、あれを屹立させたあの人は野獣だ、でも素晴らしい野獣だ！ とやった。「カリギュラ」（馬券賭け屋であり、「シドニー・パレード・プレティン」のオーストラリア東部の読者によく知られた人物であるダンル・マグラス氏）は、いつものように、本音とは正反対のことを言った。今日努力し、明日に期待しよう。我々は新聞の見出しに派手に載る仲間なのだ、と。ボイコット大尉は大きな声で言った。我々にはあの有名な神父の闘牛士が使う袖無しコートにあまりにも早く出会ったのだ。あまりにも早く会ったのだ、闘牛士に！ と。聖スマック・アリー・シアターの主唱者であるダン・マイクルジョンは、彼の独断的主張を正直に、**必要な変化がなされているのだ**、と述べた。ドラン家の家長（「かぎタバコ」とモラン家の淑女（「陽気なおしゃべり屋」）は、考え方を同じくし、意見交換し、お互いへの見解に敬意を表し、また意見交換した。大道具操作場所の汚れた服を着た音響係員は、あまりに勝手気ままに、(61)女優たちをけなす上品な娼婦と同じ言葉を発し、馬鹿な卑劣漢だ、と言った。探偵である黙り屋のシルヴィアは（私にとっては**ミネルパ**であるが、今までに愛の世界で男たちを引っ掛けてきたという噂である）、居心地のよい独身者用のアパートの一室で、本当に実にゆったりとした椅子の背もたれにもたれかかって、夢見るジョンの知らせにざっと目を通して、このことについての数々の事実の情報を耳にすると、各音節で口を細めに開く彼女の母音を響かせつつ、落ちていて次のように聞いた。記者さん、あの全くの

大事件が彼の悲劇だとあなたは今まで考えてきたの？ それどころか、この行動に対する私の考え方は、1885年制定の刑法修正法第11条細目第32項によって、それが施行されている間は、この法の中の逆の趣旨の項目にもかかわらず、この行為に対する罰を十分彼は受けるべき、というもののよ。ジャーリー・ジルクはチェルシーの自分の家に戻れなかったので、むっつり顔になり始めたが、次のような言葉で話を締めくくった。彼奴は一張羅の服ではなく、彼奴が一皮むけるのに役に立ったサックコートを着ていたのよ。海軍水兵のミーガーは、きびきびしたあっちの女とのろろしたこっちの女（こっちの女は頭に風邪を引いており、あっちの女は胃に不快感を覚えていた、これが実情なのだ、実際そうなのだ）と一緒に、いつもの俗世間的行動をとったあと、戸外でいつもの食事をするために、新しくできた魚市場の御影石の環状列石の1つに座っていた。こうした時、ほとんど自分の存在を隠すようにしていたけれども、婚約者の1人に、ワルト、呼吸を整えなさい、もう1回そうしなさいよ、とせつつかれ、そして、彼女の叔母や姉妹に、水兵さん、ズボンを正しなさいよ、とたしなめられ、赤面しつつ、彼女の母親の感謝のキスに答えて言った。僕のフィアンセ君、僕は二人分、次のことを的確に指摘しようと思う。（彼は語る！）あの男は好色丘におけるビロード色の2つの太ももに関して責められるべきだと思う — このことについて、この男や他の漁色家を、僕はどのように責めることが出来ようか。— でもまた思うに、娘っ子さん、あの男の背後の、彼のズボンの長さ程の距離に、誰か他の奴がいたのさ。キーサーズ小路にいる3人の小太鼓叩きあたりが — 君もきっとそうだと思うだろうけれど。（そのとおり！）

海の商人であり服地屋でもある人物をめぐる、ある民族に関わるこれらの寓話は、この変人である王と関係しているのであろうか。当時人々が見たり聞いたりした話は、今は忘れ去られているのであろうか。最近の重苦しい文字が並ぶ時代において、過去に起ったとして記録に残っていること以上に、このことが、実際に起ったという真実性をもっているとしたら、非常に多様な非道な行為が（まだ向かってくるはずだ！）、まさに堅実なこの誓約者に対して目論まれ、一部実行されたと、進んで知ろうとすることは可能なことだろうか。というのも、本当のことだと認められるのであれ、認められないのであれ、数多くの話が、真実をほんのわずかにしか用いない一部の者たちによって我々に伝えられているからである。そしてそのために彼の側にいる我々は、人を苦痛に陥れる彼らのペンに対して、遺憾の意を表すべきなのだ。第7の都市であるウロヴィヴラ【ウルヴェラはブッダが悟りに到達した場所。ここではアメリカの都市を暗示】は、(62)彼が避難してきた都市である（我々は平信徒たちや、彼らの話を信じたい）。彼にとってそこは、たった1隻で怒り狂う大西洋の大風を通り抜け、荒波を越え（マーラ【ブッダの開悟を邪魔した悪魔】

よ、お慈悲を！ ラーフラ【ブッダの実子】は荒海から生まれた）、ある市長と意見を交換し【ブッダは狩人と服を交換した】、夜のざわめきの下、老いた罪人として、ヴァイキングの埃にまみれた都市から、人間の虐殺の罪に対する償いをしつつ、それを忘れるために、神の摂理を切に求める気持ちから（もしその創設者をお探しならば、ムービートーン・ニュース【当時のニュース映画の会社】に聞き入るべきだ）、心の安らかさを再生し、女のカトリック教徒と手を携え運命を共有しようと、こっそりと逃げてきた場所なのだ。私の女王として私はあなたを受け入れることにしよう、私の夫として、私はあなたを縛り、繋ぎとめよう。この地は荒地であり、暗闇の地であり、悲しみの地であり、エメラルドのトロイであり、農民が働く牧草地であった。ここで、契約を伴う第4の戒律により、使徒としての彼の日々は神の豊かな慈悲によって長く続くことになった。高みから声を轟かせる神は、自分はあらゆる人々とともに、彼に立ちだかるものとなると呟いた。このあらゆる人々の中には、特権を与えられ得る者、奴隷を好み、彼に危害を及ぼす人々が集まった都市の住民、一団となって霊のようにつきまとう、彼の悪態の対象となるような、哀れな浮かれ騒ぐ人間たち、墮落しやすい生者である俗人、神聖なる国の墮落していない聖人たち全員、ありふれた、あるいは樂園に入る前の除け者がいた。初代のファラオであり、背中にこぶのついたケオプス【エジプト古王国の王】であり、主教であるHCEを、劇的に復活した彼らは糾弾しようとしていた。それゆえ、彼らは彼ら自身の罪を理由として、彼を罪ある者とするかもしれない。商売はあらゆる人に何事にも動じないことを教え込むが、我々が知っているこの男は、たいていの場合戦う機会を多分にもっていた。しかしそれにもかかわらず、彼と彼の妻と彼の懸念は、アイルランドという最大の脅威に対して、恐怖の虜となっていたのだ。（おそらく！）

私（真の私である！）にとって今の私は、暗闇のもとで前に進むことについて書かれた書の中の、閉じられている第6章の中の、エジプトの地界についての箇所を読んでいるように思える。ウェンズベリーでのショーの後、1人の背の高い男が、肩に怪しげな荷物を担いで、この土地特有の濃い霧の中、昔からある飲み屋「ロイズ・コーナー」亭近くの「ブア・アンド・バージェス・クリスティ・ミネストレルズ」亭という2軒目のところから夜遅く家に戻る途中、顔に拳銃を次のような言葉とともに突きつけられた。少佐、あんたは誰とも分からない（仮面をかぶった）奴によって撃たれるんだ。こいつはね、ロッタ・クラブトリヤらボモナ・イクリンといった女のことであんたをねたましく思ってきたんだ。そしてそれ以上に、その待ち伏せしていた者は（ルーカンやチャペリゾッドの教区の者でもなく、グレンダロッホの教区の者でさえなく、リトル・ブリテン通りの突先からわめいて出てきた）、(63)道端で次のように言った。えせ信者の俺は、リード店の切れ味の悪

い短いナイフに加えて、弾のこもったボブソン店の拳銃を持っていたんだが、これにはたった2つの使い道しかなかった。というのも、使用法は正反対で、1つはあの女、あの売春婦を確実にピストルで撃とうとするもので（あの女も確かにそう思っているだろう！）、もう1つは、それに失敗したら、叩きのめして、顔とは認められないほどに絆創膏だらけの虚ろな顔にしてやろうと思っていたんだ、と。そしてケルト人らしく、厚かましくも、一体ソートンはそのケインズ店の炉格子で何をするつもりだったのかと突っ込んで尋ねると、あの加重暴行を受けた奴は単に、こここれははは大事なものだ。週の半ば、十分うまくできるかどうか、汗だくになって試しに行ったんだ、と答えたと言った。しかしこの男の話は一点の曇りもないほどの虚偽である、心優しい書き手よ！ 彼は彼のフィートでは背の高い方ではない。また一角の男では全くない。大層な人間ではない。このような炉格子などない。このようなガラクタなどない。大層な人種などない。「人生1回に、スーツ1着店」(男性用衣料品店)から購入した屠殺人用の仕事着を着た、その鈍重な体躯の、健全な肉体の彼が、これで決まりという味のシングル【ビール的一种】の瓶をもって、「痔の緩和への道が入り口にあるのがお分かりますか」という看板のところで、暗くなった後に町の警備員に捕まったのは、おそらくフラギー橋の下にいた（アンにとってはたった1つの人生しかない。彼女の新しい橋は古い橋となるのだ）、ミラミー・ヒューイとカラーズ・アーチャーという少女たちに関連してのことなのか。あるいは彼の12連発銃を発射して、州長官の権限を入り込ませたためなのか。

5番目のことだが、まさに町の警備員が最初にこの哀れむべき男の話を聞いたとき、それは体を動かすことが出来なくなるほどに本当の話のように聞こえた。それはアイルランド語をつぶやきながらの話で、白い糸と黒い糸の見分けがつく朝から、法的手段が「マライ」亭を閉じさせる時まで、「炎の家」亭やら、地獄の中のオウム」亭やら、「オレンジの木」亭やら、「おしゃべり」亭やら、「太陽」亭やら、「聖なる羊」亭やらで、この男が度を超えて美味なワインを陽気に飲み、そしてレイミットダウン船員宿で、抑制の効かない大失態を演じたというのであった。最も純粹で、最も平穏な意図をもった兵隊と間違えて、豚の皮のボンネットがてっぺんに乗っている石製の門柱に、うろうろしていたところぶつかってしまった。しかし当時、見せかけの戯け者であった彼の叫びながらの説明が、どんなにたどたどしくごちないものであっても、彼自身の話では、彼は【州長官のところで】執達吏として働いており、スタウトの瓶を、その素晴らしい所持品を（棍棒が短ければ短いほど、その野蛮さは大きなものとなる）、「スワン」亭にたむろする靴磨きモーリス・ビーハンが通るいまいましいその門に、力を込めて叩き付けることで、開けゴマしようとしたただけだというのだ。一方この靴磨きビーハンの話によると、自分はあたふたと靴を履き、手に明かりも持たずに、

(64)三段跳びで試合場まで行くようにして、上っ張りもネクタイも身に着けず、ストマッカー【三角形の胸飾り】を着け、眠れる荒地からゴツゴツした岩地を通り、「カルタゴは滅ぼすにやむなし」を演じつつ、銃の音に引かれながらダブリンへとやってきた。そして反芻動物の口が月の光の下、草を食んでいる中、ベッドの中で平穏を与えられ、モルモン教徒の広間にいる夢を見ていたその時、安息の土地から第4の大きないびきのような音が聞こえ目を覚まさせられた。「マリガン・イン」亭の全歴史において発せられた音の中でこれまで聞いたことがないような音(もうたくさんだ！ もうたくさんだ！)、このもぐりの酒場から発せられた、ものを怒りのあまり打ち付けるような音で目を覚ましたというのだ。ドアやそばの柱の至るところを打ち付けるような、このパベルの塔建設の終末音は、彼が常に言っていたことだが、どんなに遠いところにいたとしても、アルコール飲料の瓶から泡が噴き出す時の心地よい音ではなかった。そうであったならば、彼は深い眠りから覚めることなく、外国の音楽家の楽器が奏でるマルセイユーズ行進曲や、ポンペイの最後の3日間への序曲に、何よりも思い起こしていたであろう。しかもこの最も無意味な災難のあと、新たな雨が激しく降ってきて、昔からあるリフィー川がこれまでにないほどに泥となって平原一面にあふれ、屠殺人の前掛けやパン屋の洗浄用の手袋を汚し、「レジーナ・牢獄」のシャンデリアの明かりによって、人々は一晩中歯止めの利かない、うねる川の水を見つめていたというのだ。白々とした水を。

ほんの少しの間だけだ。理想とする世界にほんのちよつとの間入ろう、三銃士よ。アトスよ、ポルトスよ、アラミスよ、アストライア【ギリシャ神話の正義の女神】のもとを去り、天文学者のもとへと行くがいい。そして聖者の愛とケヴィンの榮譽を求めて、アイルランド人としてその地へと戻れ。映画のリールの空想世界から急いで去れ。現実の世界へと、実際の世界へと！ 白雪姫よ、紅薔薇姫よ、もしお前たちが真に価値あるものを望むならば、ハグマノキ【樹木の種類】に呼びかけよ！ サア、いちごに囲まれた陽気な集まりへと出かけよう！ 立ち去ることにしよう、ここを後にしよう！ 炎を求めよう！ 手に手を取っ

て、手に手を取って！

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947)を使用した。本文中の()内の数字は、*Finnegans Wake*の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。()内の日本語は、原典の()内を訳したものである。太文字の箇所は、書名と曲名を除いた原典のイタリック体の箇所である。

参考文献

1. Anderson, John P. *Joyce's Finnegans Wake: The Curse of Kabbalah*. vol. 1. Boca Raton: Universal Publishers, 2013.
2. Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
3. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
4. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.
5. Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
7. Slepon, Raphael, ed. *Fleet Search Engine in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
8. *Glosses of Finnegans Wake in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
9. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004
10. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』
第1部第3章の概要
(48. 1～64. 29)

大島 由紀夫

(東京海洋大学名誉教授)

ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第1部第3章48ページ1行目から64ページの29行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。第3章では、オライリーの歌がHCEの醜聞を広めた時よりずっと後の状況、HCEの裁判と無罪放免という結果、HCEの醜聞についての人々の意見、HCEのアメリカへの移住などが扱われている。

キーワード: 『フィネガンズ・ウェイク』、 第1部第3章、概要